自然的な生き方

欠端　實

目　次

はじめに
一、生存競争の渦中にて
二、思想的転機（一）――生命の危機
三、思想的転機（二）――自然への開眼
四、転換の本質的意味
五、転換の諸側面
六、再生の足跡――自然的生き方
むすび

はじめに

ある一人の人間の全人的転生が、自然への開眼と、それに随伴する、自然と己との関係の再構築の結果である場合がある。とりわけ東洋世界においてはそうした例が多いと言えよう。東洋人の生き方にたいする自然の影響力は、古来非常に大きいものがある。

自然的な生き方と言えば、「道は自然に法る」とした老子や、人為をもって自然を滅ぼすなと主張した荘子が思い浮かぶ。荘子の「自然のバランスですべてを調和させ、きわまりない変化にすべてをまかせていくのが天寿を全うする方法である」という主張、そして人間としての最高の領域は、人間的なものとして自立する道徳を実践

する世界ではなく、自然との合一を実践することであるとする考え、そのために努力して無為自然の域に達することをすすめる主張に、古来どれほど多くの人が惹かれたことであろう。

また老荘の人々ばかりでなく、「死、生、命あり」（人間の生、死というものは、人間の力でどうなるものでもない。天に任せるほかない）とした孔子も、「天、何をかいうや。四時行われ、百物生ず。天何をかいうや」（『論語』）の言あるごとく、自然の法則が厳然として存在し、自然現象の内に道が顕現しているという考えをもっていたことがうかがえるのである。

日本でも、俳諧の道を確立した芭蕉は「造化に従ひて四時を友となす。見るところ花にあらずということなし。思うところ月にあらずということなし。造化に従ひ造化に帰れとなり」（『笈の小文』）と述べ、造化すなわち宇宙的意志に従おうとした。そしてまた端的に「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」（『三冊子』）ともいっていることは有名である。

またインドのタゴールも、自然への開眼を契機として釈尊が何を説こうとしたのか理解できるようになったことを、美しい文学的表現をもってつぎのように述べている。

「ある日の夕方、私は小船に乗り、美について書かれた一冊の英語の本を読んでいたが、読み疲れたので蠟燭の火を吹き消したところ、小船のすべての窓から月光が降り注ぎ私の座っていた部屋一杯に満ち溢れた。その小さな一本の蠟燭がテーブルの上でともっていたため、大空に輝く月光は私の居る部屋の中へ入ってくることができなかったのである――。部屋の外では無数の美が天界と地界に充満して中に入る機会を待っていたのを私は知らなかったのだ。我々の自我とはそのようなものである。つまり、もっとも身近なこの自我は、我々のもつあらゆる知覚力を周りから覆ってしまっているため、大空に満ちた無数の喜びを我々は感じとることができ

ないでいるのだ――。したがって、この自我が消滅すると同時に筆舌に尽くせぬ喜びが一瞬のうちに我々のもとへ完全な形で姿を現してくることだろう。そしてこの喜びを得ることこそが釈尊の説かれた真の目的なのだということは、釈尊が現界・霊界のあらゆる衆生に対して友愛の心をもつように説かれたことを考え合わせれば理解できるはずである。世界には無限の喜びが存在しているが、その喜びもまた釈尊の説かれる喜びと同じ性質のものである――。つまり、世に存在するすべてのものを限りなく愛するという性質をもつ。この世のすべてのものにむけられた普遍的愛を得ようとするならば、自分の内にある自我を消滅させなければならないが、この教えを説くために釈尊はこの世にお出ましになられたのである。そうでもなければ、人々が自我消滅という真理に関する言葉を聴くために釈尊の周囲に群がりはしなかったはずである。[1]」

以下に紹介しようとする広池千九郎も後半生を自然の法則に随順した生き方をした一人である。彼は中年期に人生の壁に突き当たったのを機会に、それまでの生き方を根本的に改めて、内面的な高い道徳性に支えられた生き方をめざした。その際、彼の転生を導いたのは、日本文化（彼の場合は神道）が伝承してきた「生かされて生きている」という考え方であった。生命の危機に陥っていた広池は、日本文化が伝承・保持してきたこうした考え方によって、自己の生に内在する自然に開眼し、自己の生の被造性を強く自覚した。いうなれば「生かされて生きている」というのは、広池にとって「絶対他力」の神道的表現であったのである。自己ならびに宇宙森羅万象を支配しているのは自然の法則であり、本体であり神である、と考え、自立的世界から絶対他力の世界に入った広池は、胸中に深い安心と歓喜を得ることができ、奇跡的に生命の危機を脱することができた。そしてこの自然の法則に随順した生き方を知ったことによって、自己の本来の生き方に目覚め、生涯堅くこの道を守った。彼は自己の考えをまとめ、後年『道徳科学の論文』を刊行した。その中で自然的な生き方に関して詳しく述べてい

るが、今その中から二三紹介しておこう。

「私ども人間は、（中略）自然の勢力に対しては、ほとんど無力のごとくに屈伏せねばならぬのです。[2]」

「すべて自然の法則すなわち神の意思に従うほか方法なきことを自覚するのが最高道徳の根本原理であります。[3]」

「最高道徳にては自我を没却して自然（神）の法則に従うのがその生活の原理であります。ゆえに純粋の他力であります。[4]」

ところでこうした自然的な生き方は、自己一人の安寧に自足する、といった生き方を示すものではない。それとは反対に、他人の幸せのみを願い、その実現にむかって努力することを要求している。その理由は、宇宙自然の法則の本体の本質を「慈悲寛大自己反省」という宗教的、道徳的内容をもつものと規定したからである。従って、広池が、自然の法則に従って生きるという時、それは他人の幸せを願いその実現に向かって猛然として突進していく、ということを意味しているのである。事実、広池の後半生の足跡はそのことを証して余りある。広池は「自分をおいて専心他人の幸福のみを祈」り、「たとい杖にすがり、車に乗りても」他人の幸せの実現のために、どこへでもでかけたのである。こうした点から、広池の自然的な生き方が、非常に積極的、道徳的な生き方であったことが確認できるはずである。

以下に、広池の足跡を追いながら、日本文化のなかで謳われている自然的な生き方の一つの具体的な例を紹介したい。

一、生存競争の渦中にて

広池は九州中津に生まれたが、明治二五年、二六歳の時、学者を志して上洛、さらに二八年、東京に出た。この間、なんとかして早く出世をして親に孝行したいという念に燃え、妻子のあることをも忘れたような激しい研究活動を続けた。この間の広池の行動の規範ともいうべきは「力なければ相手にならず」という寸言の中に言い尽くされている。広池にとって力こそすべてであった。どんなに何を言おうとも、力のない者は相手にされない。広池にとってそれが世間であった。

明治維新を経過して、日本には激しい上昇気流が渦巻いていた。人々の頭脳は適者生存という思想に支配された。広池もまた同様であった。みずから「学問界の突貫兵」を自認して、命をかけた苛烈な人生生活・研究生活をおくったのである。

「余は、積年しらずしらずの間に、生存競争の渦中に巻き込まれおりて、自己の出世・名誉・利益を重んじ、これがために競争・躁進・偏執・妄念に駆られ（下略）[5]」

というありさまであって、一見平静にみえた学究生活も、その内面をのぞけば、あらゆる人間心が激しく葛藤して渦を巻いていたのであった。もちまえの正義感をたぎらせて日々の生活を押しまくって行ったのであるが、心中に平安のあるはずはなかった。

「インナー・ライフにおいてただ単に忍耐克己するに過ぎずして、多年日夜不平・忿懣・怨恨・苦痛を感ぜし上、更にその外面的なる社会生活に正義をもって押し行くの結果、破邪顕正となりていよいよ心中平和を得ざるの致す所なり。[6]」

青年時代から大きな抱負を抱き、学界でそれを実現しようとした広池は、幸いにも才能にも恵まれ、努力の甲斐もあって、学者としての自信を深めて行く。しかしやがて世に認められてくるにつれて、自信が昂じて高慢心に変じていった。優れた人がつぎつぎと現れて来るのが世の中である。したがって勝者を目指しその位置を独占し続けようとすれば、どこまで行っても、鎬を削るような生活に終止符が打たれることはない。また組織の中では才能のあるなしとは別に厳然とした上下関係がある。こうした中で自信家変じて高慢心に満たされた広池は自ら心の暗闘に苦しめられ、「常に不平不安の念に打たれておったような次第」[7]となった。

「抱負という事は善い事であるが、どうもそれが非常なる高慢心として現れ出でやすいので、その高慢心が他人との衝突となり、もちろん外部に現われた衝突でないにしても、いわゆる心の角突き合いというごとき事にて、何となしに他人と頡頏する気味あり、これがまた心の不安となるのである。つぎにまた上官の不公平なる処置などが何となしに不平であって、嫉妬・怨恨・憤怒の念が常に心の中を往来していた傾きがあったのである。[8]」

明治の社会の中で、使命感に燃えながら、巨大な時代の波に乗ろうとして懸命に努力した広池が、他方でわが身わが心を、いかほどさいなんだことか、想像に余りあるものがある。

しかし広池は生存競争の波にもまれながら、長男として、郷里に残して来た両親に対する孝養を怠らなかった。珍しい茶菓や果物が手に入ると苦心して郷里の親元に送り届けるという道徳の人であった。しかしながら、それは苦しい道徳の人であった。なぜなら表面は世間から称揚される道徳の人であっても、内面には葛藤が渦巻いていたからである。この間の事情を広池は正直につぎのように告白している。

「私は前述のごとくに、口ばかりでなく、(道徳を)実行いたしたのです。しかしながらその実行は、多くは形式に止どまっておって、精神がこれにともなわなかったのであります。すなわちその一例をあぐれば、私は親

にたいして孝行はいたしておったれど、私には五人の弟や、妹がありますものですから、両親から月々のきまりの外に、何とかかんとか色々に物入りが多いために、度々臨時に送金を申し付けてくるのです。私は始終家族とともに不自由がちに暮らしておりますものですから、これにたいして甚だあい済まぬことではあったれど、時々不平不満が起こり、心のうちにて親をうらみ憤ることがたくさんあったのであります。また私とても以前からいくぶんか慈悲の心はありますので、慈善金を出したこともありますが、さてこれを出す前には真実慈悲の心だけでするのでなくて、義理や人情やほしい・おしいの心使いをいたし、さて出した後は、自分の額が比較的他より多かったならば高慢我慢の心使いが出るのでした。[9]」

かの芭蕉も若いころは「是非胸中に戦うてこれがために身安からず」という状況だったという。若き日の広池もまたそれを彷彿させるような状況であり、心中に喜びのない「道徳の人」であった。

広池は元来体の弱い、神経質な子として育った。[10]そのため両親は広池が丈夫に育つために人一倍心をくだいた。広池が郷里を後にして東京にあったときにも、父親の半六は、三十を迎えた息子ながら、ことに夏場には弱いことを知っていたので、その健康を気遣い、祈るような手紙をしたためている。

「暑い時分ですから、皆用心をしなされ。内にも用心ばかりをしております。御名号様(筆者注：仏様のこと)を朝晩、二度のお礼はして下され。忘れんようにお頼みを申します。長命がしたいなら、弥陀を頼んでお念仏を唱えなされ。念仏を唱ゆればかならずかならず長命をする。このことばかりは二親ともに手をさげて頼みまする。御名号様を大切になされて拝みなされ。[11]」

「二親ともに手を下げて頼みまする」——この言葉には、長男の健康状態を気づかっていた両親の気持ちが痛々しいほど滲みでているではないか。もちろん広池自身そのことは良く承知していた。栄養にも気をつけ薬も服用

し、苦手の夏場は温泉地で保養につとめた。しかし一刻も休むことのない研究生活と、激しい気性からする心の葛藤の連続は、大患を醸す原因となった。

二、思想的転機（一）——生命の危機

この広池に転機が訪れた。それは明治三七年、三八歳の時の大病である。長年の激しい研究活動と内面的緊張が、発病を促したのであった。一時は死を覚悟して妻子を枕元に呼び、死後のことを指示したほどであったという。しかし広池はこの病気のときも、ただ前進のみを考える人であり、退くことを知らぬ人であった。玉と砕け散ることばかり考え、しばしば「斃れて後止む」を口にしたという。友人の江見清風は書簡を送ってつぎのように忠告している。

「君がしばしば云わるる斃れて後止むというは、極めて語弊あるもののごとく聞こゆ。人は決してかくのごとく窮屈なることをなしては、勝利を得もうさざるべし。勢いの可なるを視て進み、不可なるを視ては退き、屈伸自在の妙を尽くして自己の志業を全くするは、有志の徒のなす所にあらずや。いたずらに小感情小事情に拘りて身心を損し、志業を破るがごときは、大人物のなす所にあらざるべし。されば、斃れて後止むなどの妄念を去り、悠々寛々、よく将来の御志望の成就いたし候よう、御経営専一に希いたてまつり候。[12]」

若さも手伝ったのであろう、幸いにもこのときの病は一応はくぐり抜け一命はとりとめることが出来た。しかし以後も病身であることに変わりはなかった。明治四十年、神宮皇学館教授として単身伊勢に赴任したが、病気再発の不安と隣合わせの毎日であった。

「職務は神宮皇学館の教授で、授業は一週間四、五時間にすぎないのでありました。そこで二見が浦に下宿して

白砂青松の間に起臥し、もって心身の静養に努めました。しかしながら、この時に当たっては、全身の神経衰弱既にその極度に達し、夜間静かに寝につきて眼を閉ずる時には、その心身の衰弱を感ずることはなはだしく、大患の不日に襲来すべきことを自覚せずにはおられなかったのであります。ただし肉体の摂生法につきては、従来相当の滋養物を食するのみならず、あらゆる滋養薬を用いかつ健康増進の方法を実行し、いやしくも肉体に害あるものをば極度に節制し、かつ神に対する敬虔無二の信仰を持し、あらゆる点より肉体の保存を図ってきた結果が右のとおりでありますから、ここに至っては、百計尽きて寒心に堪えざる状態でありました。[13]」

その後、状況は一向に好転する気配もなく、むしろ徐々に悪化していく様子を見せていた。

「明治四二年、研究の歩おおいに進むと同時に、疾病身を襲い、昏々として学界にたいする光明を没したり。[14]」

「しかるに身体はもとより弱いので生命は実に風前の灯であったしだいですから（下略）[15]」

風前の灯——これは文字どおり道を立ちふさがれた状態である。通れぬ日の、近い将来にくることが予感されていながら、施す術もないまま時間が経過する。経過する時間は不安をつのらせるばかりであったであろう。目の前に広がるのは深々とした暗黒のみである。血路を開くにはどうすればよいのか。自己の力に絶対的な自信を有していた広池もここに至って、自己の力の限界を認めざるを得なくなった。

「元来、自分の性質は、非常に自信力が強くて、かつ大なる抱負を持っておって、しかして自己の力をもっては、いかなることもなしとげ得らるるものと思考して、奮闘していたことは、予の平生を知っているところの先輩や友人が一同に認むるところであると考えられる。すなわち第一自己の活動力というものが、神の力であるということを信じたのである。しこうしてその活動力は、自己の過去における因縁によって極限せられ、したがって自己の活動力はある程度までのものであって、無限のものではないということを自覚したのである。

ここにおいて、自分が現在において活動しつつあるも、将来において通れぬ日の来るということを自覚したのである。すなわちこの活動の最後にいたれば、疾病にかかりもしくは災害に遭遇して、その活動力の中止せられざるべからざる時にいたることのある日を自覚したのである。

しかしてその通れぬ日の来るということはいつであるかといえば、これは人々において皆異なるのであって、過去の種の蒔き方の善し悪しによりて、永く続く人と短き人と、またそれが永くかつ大なる活動をなしおる人と、短く小なる活動をなしおる人とにわかるるのであることは、これまた神道各派調査の際において、幾多の現象を総合帰納して得たところの原則であって、この原則より推し考える時は、自分の運命は、過去における種の蒔き方が、あまり宜しかろうようにもないから、今後久しくかつ大きく続こうとは思われぬのである（もちろんこれは宗教心よりいうことです。我輩は倫理にはずれたことをしたことはないつもりである）。しかる時は、いわゆる通れぬ日の来るということは、遠き未来のことではないと気がついたのである。[16]」

近い将来において自己の命運の尽きることが、確実に予感されていながら、同時にまた自己の力でそれを回避する術がないことも認めざるを得なくなっていた。伊勢の神域、白砂青松の二見が浦に身をおきながら、心に広がる風景は荒涼たるものであったにちがいない。

こうして、自己の力に限界があるという自覚が生じるとともに、自己の力のみによって自己の生存が全うできるものではないという、人間がおかれている事実を直視するにいたったのである。そこに至る直接の契機となったのは、日本の文明が育ててきた深い自然観との邂逅によってであった。

三、思想的転機（二）——自然への開眼

若いころから道徳的生活を送っていた広池が、内外両面の統一をもたらし且つ自己の健康を維持できる「道徳的」生活を全うするためには、宇宙のつながりの中で自己の生命をみつめることが必要である、ということを認めるようになったのは、神道研究による。とりわけ神道各派—たとえば実行教、禊教、黒住教、金光教、天理教など—の教理にみられるような「われわれは生かされて生きている、われわれのからだは神からの借り物である」というとらえ方に深く心動かされたからであった。神道の宗教的要素（たとえば生かされて生きているという考え方）に大いに注目したのである。研究と自らの実践の結果、自己の生命は宇宙の中に働く法則に深く支配されており、その中で多少の自由意志を働かせつつ生きていることを、身も心もあげて、からだで納得できるようになった。そしてさらに生かされて生きていることを、許されて生きていると受け止めるまでになる。かくて生かされて生きていることへの限りない感激と、我が身・我が心を自分本位に使用してきたことへの反省・懺悔と、それにもかかわらず許されて生きていることへの感謝という念に満たされるようになった。こうしたいわば宗教的精神に支えられてはじめて、魂の平安がもたらされ、従来の道徳生活に内面・外面の統一がもたらされ、自己の生命もまた再生する、と確信するにいたった。

以上のように、広池の自然への開眼は、神宮皇学館での授業科目のための神道研究によってもたらされたのである。そのため、自然への開眼は神道が有する宗教的精神への開眼という形をとったのである。従来の自身の生き方に欠けていたものは宗教的精神であった、という時、その言葉の意味するものは、生かされて生きていることの深い自覚と感謝、そして我が身をも包みこんで宇宙森羅万象を包容している本体に嘉みされる生き方を歩む

覚悟、これらに思い至らなかったということを意味していよう。

広池にとって道徳的生活をおくること、この点に関してはいささかも変更はなかった。ただし充全な道徳的生活、よき果実に恵まれる道徳的生活のためには、宗教的精神が不可欠である、という自覚が追加されたのである。

以下にまず倫理・道徳と宗教を比較検討した広池の考えを紹介しつつ、広池が「宗教」という表現で、心身を挙げて自然の法則に従おうとしたことを確認したい。

「我が固有神道は（中略）終始倫理と宗教との二方面を兼有して、これを失うことなし。（中略）倫理において（は）単に普通の人道を教え道徳を守らしむる事はできれど、人類の心を救済して、その心の煩悶苦痛を消し、またその結果、医薬の及ばざるところを補いて人の病を救うがごとき事はできぬのである。いわんや宗教は人心をその根本から改めさせ、倫理以上の道徳を行わしむる事ができる（において）をや。」[17]

広池の神道研究が進捗するにつれて、倫理（道徳）が宗教との比較において考察されるようになった。その結果、倫理（道徳）は社会のルールを教えることはできるけれども、個人の魂の救済ひいては病の癒しは、倫理（道徳）では無理であって、宗教的な力に待たねばならない、と自覚されるようになったのである。道徳的生活は、生活のすべての場において、からだを挙げて実践すべきものであって、そのためにはどうしても宗教的な心になりきることが必要であると確信されるようになった。

本来、道徳と宗教は対立し背馳する面をもちながらも、一方で、内面的には連環している。道徳は常に宗教心のはたらきかけによって、内面的な深化や浄化が促される。この意味において、道徳には宗教化が求められている、ということが言えるのである。「道徳は、いかなる具体的な宗教にも依っていない、それ自身の本質において宗教的なものである」（ティリッヒ）、あるいは、「道徳は宗教的なものを有しないとき、道徳でなくなる」（デュ

ルケイム）などと言われるゆえんも、こうした道徳と宗教との関係にあるのである。広池も自己の大病や神道研究を通じて、道徳の宗教化の必要性を自覚したと言えよう。

その際広池が注目したのは、倫理（道徳）的心使いと宗教的心使いには相違があって、そのために結果に大きな相違が生じてくる、ということであった。

「倫理的にては善心・善行をもって病気を直すがごとき事はできず、また非常の大事業を成就する事はできぬけれど、宗教はこれをもって人智以外、自然の法則以外（実は自然の法則の内なれど）に偉大なる効果を現す事ができるのである。すなわち倫理の方にては奇蹟を現わそうともせず、また現わす事もできぬのである。宗教にては奇蹟を現わそうとし、また現わす事ができるのである。（中略）予は奇蹟の研究をなし（中略）ついに自らこれを実験し、しこうしてさらに自分の過去における敬神状態とその結果とに徴して、倫理的心使いと宗教的心使いとの間に微妙なる相違点ありて、その相違点はすなわち倫理的と宗教的との結果に大なる相違を来す事を研究し得たのである。」[18]

なぜ心使いの相違が結果の相違をもたらすのであろうか。広池は、宗教的な心使いは宇宙の真理と一致するがゆえに大なる好結果をもたらす、と考えた。言葉をかえて言えば、心使いの世界もまた法則に貫かれており、その法則性に合致したとき好結果があらわれるということの発見であった。

「人類処世の本旨は倫理的でよいように思うておったけれど、その実は、倫理的だけでは足らぬので、これに宗教的要素を加えねばならぬということを発見したのである。（中略）その心使いと行為とが宗教の信仰より出たのでなくて、単にその位置を保つために謙遜・柔順・平和の態度を執るようなことであったならば、いかに巧みにその表面を飾るとも、その心使いと行為とが宇宙の真理と合せず、神の心と一致することがないから、決

してその効果は挙がらぬのである。しかるに一朝これを翻然として全く己を棄てて神の恩寵により、もって最後に神に助けられたいと思うて宗教を信じ、神様が見ていたもうからという心になって、真実から敵を愛するに至らば、その効果は実に驚くべきほどであって、倫理的にまた形式的に表面を飾ってうまく交際してゆくというやり方とは、雲泥の差があって、身体の健康にも、地位の保全にも、不幸の回復にも、事業の成功にも、常に大なる効果が見えるであろう。これ予の数年来の実験で、今実行しつつあることで、間違いのないことである。[19]」

これはさらに言葉を変えて言えば、宗教的な情熱をこめ全人格を傾注した心事・行為は、神に感応するところとなり、倫理道徳レベルの原因結果を突き破って、予想外の結果を生み出すという信念である。

「その行為の源泉たる心使いが宗教的であれば神に感応し、倫理的であれば神に感応せぬからである。[20]」

神に感応した予想外の結果、これを普通奇跡とよんでいる。こうした奇跡を生み出す世界もまた法則の支配下にあるが、倫理道徳レベルの原因結果の法則とは次元の異なった、言わば高次元の原因結果の法則と呼ぶことが可能であろう。

広池はさらに歴史上の偉大な人物の偉大な行為を考察し、それらの多くが宗教的な要素をもった心事行為であったことを確認するに至る。

「(孔子の) 教えの実質が『論語』を通読すれば仁すなわち慈愛にあるが故に、その教えは世人が思うがごとくに決して純然たる倫理的にあらずして、宗教的である事が明らかである。しからざれば百世のもと人心を支配する事かくのごとく偉大である筈はないのである。(中略)ソクラテスの教えもやはり全く宗教的である。とうてい人心を救済して百世の下にその印象を留める事は宗教でなければならぬ、倫理的ではできぬ事である。[21]」

「(二宮尊徳は桜町の復興の際) 無教育者や悪人やわからずやを感化するには、道理だけではいかぬ、どこまでもその無作法・無礼・怠惰・反則を許してやって、あくまでも憐みをかけてこれを心の底から感動させねばならぬという事に気がついたのである。さて、ここにおいて翁 (二宮尊徳) は全然倫理的主義より一変して宗教的主義に入ったのである。(中略)偉大なる事業は正義以上に慈愛を要し、倫理以上に宗教的要素を要するものであって、その宗教的要素の分量の大なるほど、その事業は太く永く続くのである。[22]」

宗教的精神に支えられてはじめて、道徳は生命力を有するようになり、人々に反省の念、感謝の念、報恩の念を喚起させ、人々の心に貫徹してゆき、その目的を達することができる、と確信できるようになった。これは道徳のみならず広く教育においても、その目的達成のためには、宗教的精神の注入が必要であると考えるようになった。

「教育や倫理 (中略) の道理は国民に対して普遍的にして一般に共通するものなれど、個人の心の底より感動して、懺悔遷善の境遇より一種の信念となって現われたるところのものでないから、宗教におけるがごとくに強烈なる力を含んでおらぬのである。[23]」

以上のようにして、広池は、神道研究を通じて、道徳心は宗教化されることによって、すなわち全心身を挙げて自然の法則に従うことによって、初めて所期の目的を果せるということを知るに至り、四十歳を過ぎてまもなく人生のターニング・ポイントを通過したのである。

四、転換の本質的意味

大病におちいり自己の力のみでは克服できないという自覚をもつにいたったこと、同時に、心使いの世界にも

原因結果の法則が存在し、普通の倫理道徳レベルでは考えおよばない結果がうみだされる、という事実をまのあたりにしたこと、これらによって広池の思想に大きな変化が訪れ、生き方の転換が始まる。

具体的にいえば、当時の絶望的状況を脱するためには、従来のような自力での解決が閉ざされている以上、他力によって生かされていることの承認と、そのことを信頼した生き方をとる以外に方法がない、そして宗教的な心使いを自ら発揮して倫理道徳レベル以上の結果をうみださねばならないという考えに到達したのである。

図らずも光明はすでに他力によって用意されていたのである。広池の生き方の上に訪れた大きな変化の本質的内容とは、自己の生命が、絶対他力によって支配されていることの自覚と、それにともなって自力的生き方を変じて絶対他力に随順する生き方へ変化させたことにあった。

思えば、自然の法則という絶対他力への絶対的な信頼が広池の再生を可能にしたのであった。絶対他力は宇宙根本実在の神、宇宙自然の法則などと表現される。「一朝翻然」宗教に入ったのはなぜか？

広池はいう。

「いわゆる自分の修養とか何とかいうような、そんな小さいことだけに心を傾けたためではない。まさに宇宙に根本実在の神ありて、それが吾人の体内に生きて働いており、神人相関係して人心の趨くところ神意これに応じ、肉体の健否・生死の理・運命の鍵・宇宙人類の進歩・退歩の理法みな一つにかかりてここに在る、というこの自然の大法則を知ったからである。健康たのむに足らず、いわんや富貴をや。借り物にして一夜の間にも滅亡す。人力いかんともすべからず。[24]」

宗教に心を傾けたのは、我々の身体に神が生きて働き、我々一人一人の健否・運命の鍵を握っていることを知ったからであるという。内面から、絶対他力によって生命が支えられていることの自覚が、広池にいかほど大き

な衝撃を与えたか推察に余りあるものがある。身体に神が生きて働いている以上、我々の一挙手一投足のみならず、心意までも神に見通されていることになる。中国漢代の楊震が「天知る、神知る、我知る、子（あなた）知る」といったことは有名であるが、そのいわゆる四知を想起させるものがある。

「万物及び吾々人間と申しますものは、宇宙の一部でございましょう。それゆえに吾々の身体を神の屋形と申すのでございます。（中略）これによりて吾々人間は、どんな事を考えても、どんな事をいたしても、この自分のかりておる肉体を使用せずにはできんのであります。ちょっとした事を考えても、脳とか神経とかを使いましょう。また暗夜にさぐっていても、やはり手とか足とかいうように、すべて神様の肉体を使うておるのであります。そこで吾々のする事、思う事を、神様の知りたまわぬ事は一つもありません。[25]」

「根本の神霊を天つ神または天の御中主の神という。すなわちその肉体は宇宙にして、心霊は宇宙の活動変化発達の理なり。しかしてこの理や天地の間在らざるところなく明暗照らさざるところなし。（中略）根本神霊は人間の心霊・肉体・運命の一切を掌りて吾人人類を内面から生活さしてくだされ――（下略）[26]」

かくして広池は、以後、自然の法則（神）に随順した自然的ともいうべき生き方を固守したとも言えよう。既述のように昭和三年、六十三歳のとき広池は『道徳科学の論文』を刊行し、その中で、幸福と平和の実現のためには、従来の道徳に代わって最高道徳を実行することの必要性を強調した。そこで提唱されている最高道徳的生き方もやはり自然の法則に随順するということを根底に据えているのである。重複をいとわず再度『道徳科学の論文』の資料を挙げておこう。

「私ども人間は、（中略）自然の勢力に対しては、ほとんど無力のごとくに屈伏せねばならぬのです。[27]」

「すべて自然の法則すなわち神の意思に従うほか方法なきことを自覚するのが最高道徳の根本原理であり

ます。[28]」

「最高道徳にては自我を没却して自然（神）の法則に従うのがその生活の原理であります。ゆえに純粋の他力であります。[29]」

「宇宙根本唯一の神は（中略）宇宙の一切の事を支配し、且つ人類をはじめ森羅万象の生命をその内部より直接に支配し、その生死・健康・疾病及びあらゆる運命の保存・発達・変化の原動力となっておるのであります。（中略）故にわれわれ人間の生命の保存と幸福の増進とは本体と現神との二つの神の力によるものであって、その一を欠けばわれわれの幸福は全からぬのであります。[30]」

「まず宇宙の現象をもって神の表現となし、私どもの心をもって神の心の分霊となすのであります。且つその分霊の行為が本体の霊の法則と一致する場合には、その分霊は幸福となり、然らざる場合に不幸となるものと見なすのであります。[31]」

こうして見ると、広池は四十歳台半ば以降、生涯にわたって自然に随順した生き方をしたことがわかるであろう。

五、転換の諸側面

広池がターニング・ポイントを経過して以後、日常生活の上に顕著な変化が現れてくる。今、重要なものをあげておこう。

(1) 自然の法則、他力（神）の支配下にあることの自覚

まず、当然のことながら、自己の限界を自覚してから、病いに苦しめられつつも自然の法則性（広池はこれを神と表現する）に随従しようとする姿勢を強く保持しようとする。自己の理性、自己の意志のみではいかんともすることが出来ない面を有するのが人間の真実の在り方である。神の愛に眼をむけて、神にゆだねることによって、深い安心を肚におさめることができるのである。

以上のような心境にあったことを示す資料を、主として「日記」からあげておこう。

「今まで自分の力とのみ思い、かつ不足せしことを謝罪す。[32]」

「死生ともに神様の御心のままなり。[33]」

「予は、死生みな神意なり、因縁なり、自療にて死するも因縁、医にかかるも因縁、薬をのみて死するも因縁、のまずして死するも因縁なりと確信す。[34]」

「薬や滋養は神様ありてこそききめもあれ、神が去ったらば、いかなるものもきくものなかるべし。[35]」

「今日の予の生命の維持はもちろん、かく再び快方に向かえる原因はみな神様の力にて、信仰のしからしむるところなり。[36]」

「わが肉体は二つの勢力にて維持せらる。一は（中略）神の支配力、一はわが心。（中略）心だけが我にて、心以外すべて借物なり。しこうして、その内に住む。ゆえに絶対服従のほかなし。[37]」

(2) 和解（一）——自然の法則（神）への信頼

身体が自然の法則の支配下にあるばかりでなく、心をもまた自然の法則に添うように働かせるならば、心の働かせようが肉体に良好な結果をもたらすことを、広池は自他の病の癒しによって確信を得たのである。からだに

おける心と身体、この両者の拘わり方を科学的に明示することは、広池にはできなかったけれども、自らの真剣な取り組みによって、体験的事実として、具体的に好結果をおさめることには自信を有するようになっていった。したがって、宇宙の本体にかなう心使いは、求めなくとも身体に良い結果をもたらし、やがて生命の危機を乗り越えて平常に復することができるということにたいして、体験の累積とともに自信を深めていった。自信の深まりは結果を信頼する態度となって、広池の新しい人格を形成していく。もちろん、そうは言いながら広池の歩んだ道は決して平坦な道ではなく、動揺することもあり紆余曲折があったことは言うまでもない。しかし徐々に自然の法則に信頼する態度は強固になっていった。

「予は今や神様に信頼して心埃を払い、ほとんど前日に比すれば別人のごとくなりしように思えど（下略）[38]」

「一筋に神にもたるること。[39]」

「神様にすがり、大胆にくらすほかなしと考う。[40]」

「今晩より一層確守して何らの埃を心に留めず、一意神にすがり、全快を確信すること。[41]」

「日々の心使いで、自分は助かると助からぬとが分かることを深く注意のこと。のどかな心となること。一切春のごとく、海のごとくなること。[42]」

「心一つで助かるという神の教えを一心一筋に守りまして、死に至るまで改めません。[43]」

「ただただ神様にすがるばかりなり。なるよう行くようの心使いにて、心埃を祓除し、八面玲瓏の心境を現出せんことを期す。[44]」

ここでいわれている神とは、自然の法則と同義である。自然の法則を信頼し、これに全く随順していた様が彷彿されるのである。

(3) 和解（二）——他者との和解

宇宙とのつながりの中で自己の生命をみつめることは、必然的に万物同根を自覚することにつながっていく。そこからさらに人間、動植物等すべて命あるものへの慈しみの情が出てくるのは自然である。

大正元年十一月十二日の日記には、入院先の病院で「日光浴」をとり、「その際天地自然の状態を観察し、顧みて宇宙の真理に想到す」としたためられ、続いてつぎのような内容が述べられている。

「つらつら天地自然の現象をみよ。花あり、月あり、山川草木の景色あり。実に美なり。稲の穂、大根の葉、蒸々として熟成す。真に善なり。しかしその間に糞土あり、曲道経路あり、不毛の地あり、朽枯せる草木あり。しかもこれらの糞土や、曲道経路や、不毛の地や朽枯せる草木は、やはり自然の美をあやどりて、我が心を楽しましむる材料となり、またこれが善美の現象を生成する原動力となるものなり。故にしたがって吾人は、これに対して痛切に醜悪の情を起こさず。これ、己の利害と直接に関係せぬところからあざない、人間の心から痛切にこれを醜悪とせぬだけのことである。しからばすなわち、己の身に近きものや己の利害に関係あることを悲哀し、憤慨し、怨恨し、杞憂するはあさはかなることなり。己を捨てたる聖人の心にあらず。見よ、神はこの森羅万象を包括して杞憂することなく、自然の法則はゆうゆうとして迫らず。

何事を見聞しても憂うることなかれ、悲しむなかれ、怒るなかれ、怨むなかれ、不足をつむなかれ。その必要は決してこれなし。悪をなす人には殃の理めぐりきたり、善をなす人には幸福あり。皆こちらよりやきもきせずとも、天理循環、因縁の理は一糸みだれず、必ずそれぞれに報いあり。その心をもって万人万事に臨み、ただ己の心を研き己の本分をつくし、日の寄進を忘れずば、心広大にして快活なり。正に大宇宙と一致して、

心界繊塵なからむ。[45]」

ここに述べられていることは、宇宙の働きを悟道したときに、人間社会のすべての人々と和解すべきことをも併せ自得できた、ということである。もちろん現実にすべての人に、「広く大きく深い」愛をもって接することができるようになるまでは、多くの曲折と十数年の求道生活がなお必要であったのであるが、自然的な生き方が他人との和解を内包するものであることは注目すべきである。

周囲との和解は、当然他の国家・民族にまで及ぶものであった。

「人類の社会的結合、国家的結合もしくは人類団体の結合の上より見れば四海みな兄弟にして、たとい自己一人悟道し、もしくは物質上の富を得たりとして、自己の仲間たる社会・国家もしくは人類の中にいまだ精神的悟道を得ざるもの、もしくは物質的満足を得ざる者があったならば、自分はなおいまだ全く悟道し得た者とはなれぬのである。(中略)神の慈愛心は人類の全部をひとしく救済せんとするのにあるので、宗教の理想は人類のすべてを富ませ、人類のすべてを満足さするにある(下略)[46]」

「最高道徳はすべて以上のごとき古聖人の教訓に基づき、いかなる場合にも、わが精神の奥に人心の開発もしくは救済の念を有して、他人の幸福を図ることを自己の根本目的となし、『苦労はわが身これをなし、その結果は『これを他人に与えて一切の人々を幸福にしてください』と神に願うのであります。[47]」

こうした見地から、広池は国際間において武力に訴えて政治問題を解決することにたいしては極力反対した。

「これから後は日本の同民族はもちろん世界のすべての各民族を、たといいかなるものでも、なるたけ正義や干戈で威服する事排斥する事は止めて、これを愛しこれを救済する心持にて世に立って行くようにしたいものであると考えているのであります。[48]」

広池が戦争防止に具体的な行動をとったのは、上海事変のときである。このことに関してはすでに小論を発表したことがあるので、ここでは触れない。[49]

(4) 人間の再生

全身をあげて自然の法則に随従し服従しようとすることが、どうして人間の再生に結びつくのであろうか。

身体は宇宙自然の法則(神)の支配下にあるものの、心には自由の余地が与えられている。心の用い方いかんが鍵である。ではこの心をどのように使用すれば、生命の回復に結びつけられるのであろうか。自然の法則にかなった心使い—それが実現された時、それに応じた良好な結果が現れてくる。では、自然の法則にかなった心使いとはどのようなものか。それは慈悲至誠の心であって、「わたしはどうなってもかまわない。どうかあの人に幸せになっていただきたい」という犠牲心、強い道徳心である。自然に随従する生き方は決して受け身のものではない、ということを知るべきである。我身を顧みずに一意信願、熱禱をもって他人の幸せを祈るとき、自然の法則(神)がこれに感応するのである。これを広池は目に見えざる原因結果の法則として「無形の理」と呼ぶ。後述のように、広池は自ら実践して幾度も幾度もこれを身をもって確認している。広池自身にとっても自己のからだを保つためには至誠心の発露がぜひとも必要だったのである。

「万一この心が神様の心に適うたらば、寿命も延び(下略)[50]」

「予の心に慈悲真実の油を貯えて、その力にてなき寿命を延べさせていただくことは出来るのである。[51]」

「今回の病のごときも、(中略)心使いが天理(筆者注:自然の法則)にそわぬところありしより起こりしものと思い、深く恐れ入っております。したがってこれ(筆者注:病のこと)を直すには、立派な心使いが大切で

あると思うております。[52]」

「ただこれ（筆者注：滅亡）を防ぐは無我の慈愛に本づける平素の心事と行為とを神に捧げて、その照鑑の下に自然律の制裁を仰がんとするにあるのみです。[53]」

「誠は自分の身体、生命を保つに必要なり。[54]」

「天然自然の道により、天然自然の時を待ち、我力によらず、我はただ我心事行為の到らざる所を反省して、我誠意を増大する事のみに努力（下略）[55]」

六、再生の足跡——自然的生き方

以下に、広池自身が、自己の更生をすすめ完成させ、自然的な生き方を歩みはじめた記念すべき三つの体験に関する資料を挙げる。いずれも「大死あるところ大活現成する」ともいうべき体験であったことが示されている。自然の法則（神）に随従すること（大死）によって、運命も生命（健康）も「大活」していることに注目すべきである。これは、ただ単なる精神上のできごとではなく、全身心をあげて全身心からわきあがった、一種の感動をともなった魂をゆさぶる経験であったことを物語っている。

(1) 二見今一色（明治四三年）

広池は明治四三年の伊勢の二見での体験を、後年（六二歳のとき）になって回想して、四四歳のときのこの体験は「自然の法則に絶対服従」をなし得て、更生への道標となった記念すべき体験であったとしている。ではどのような内容のものであったか検討してみたい。

神道各派が伝承してきた日本文化における「誠」の心をもって生きたときには「病気も直り、健康も進み、長命を致し、かつ運命をも僥倖にする」と知らされた広池は、自己の病苦から脱することをも考え、自ら「誠」を体験してみようとする。そして重病人に対面する。「ただ死を待つばかりの病人に道徳心を注入して、その精神を改造しこれを更生せしめ、併せてその肉体の病を自発的に除去」させねばならなくなった広池は、「当惑」し、自己の無力であることを痛感した。そこで広池は自分もまた病に捕らえられて「暗夜」に身をおく人でありながらも、病人のために我が身をすてて、命懸けで、他人の病の回復（幸福）のために、熱い祈りをささげて、病人のもとに通い続けた。その結果、重病人の回復という予期もせぬ結果に恵まれたのである。重病人は、広池の、我が身を犠牲にしての「誠」の心で回復することができた。そこで広池は、誠の心とは、苦労は我がする、幸せはあの人にという代受苦的、代贖的精神であるということを確認した。そしてその誠の精神になりきるということが、精神面での「自然への服従」なのである。したがって「誠」という自然への服従がなされたとき、自然の法則上の結果が出てくる。これが奇跡であり、神の恩寵なのである。

したがって自然への服従とは、「生かされて生きている」存在であるわれわれが、我々を生かしている自然の法則に、身も心もあげてからだ全体で従っていくことである。我々を生かしている本体ともいうべきものの本質とは、具体的にいえば、たとえば日本文化が伝えてきた「誠」の精神である。広池は以上のように考えたのである。

以下、この間の経緯を示す資料を掲げておこう。

「ところが前に申しました通り、二見でお助けをさしていただいた時には、私はお道のためどんな苦労もさして貰いますから、なにとぞこの人を助けて下さいとお願いしました。前の五ケ条（注：広池の青年時代の中津あるいは大阪堺における誓い）は『苦労は我がする、幸福は我に下さい』というのでしたが、今度のは『苦労は

我がする、その報い・幸福はこの人にあげて下さい』というのです。これこそ誠である、犠牲である、実に非常な犠牲であると深く私は感じたのです。（中略）これが明治四三年の春二月一四日の晩のことであって、これから私は道へと進んできたのであります。[56]」

「伊勢、二見浦の今一色の講社にて難病の中風患者などに出会した時に、たとえ我が身は何となっても、この難病人の心を助けさしていただきたいと、思わず知らずに神様に願いました。後から考えてみれば、それがすなわち誠でした。それ以前は神様に向かって自分の幸福を願うておりましたが、かようにお助けに出て、難病人に出会した時に、思わず知らずに我が身をすててもこの人を助けたいと思いました。その心がすなわち誠であったので、ここに私もはじめて誠の真味が実地に分かりました。倫理的に分かっておる智者はありましょうが、実地に誠の心を体得することの出来ておる人は世界には稀です。[57]」

「かの『病人のお助け』に出で候時のごときも、常に小生は神様に対して『この病人の心を救い、この病人の病を助けたまえ。私はその代わりいかなる苦労も厭わず、私の至誠のあらん限りを尽くして人のため世のために働かせていただきます』と祈願するように相成り候。すなわち換言すれば、爾来小生は神明に対して、苦労は我これをなし幸福はこれを他人に与えたまえと願うごとき心事に変化致し候。これすなわち真の誠の心にあらずや。犠牲と称し慈悲というはすなわちこの事ならんと愚存つかまつり候。小生、信仰以前にありて自己の至誠を世に捧げて自己の幸福を祈りおりし時代と、自己の全努力・全至誠をもって世人の幸福をのみ祈願致し候心事との雲泥の相違出来候こと、恐れながら御賢察なしくだされたく候。[58]」

この自然の法則の本質を具体的・歴史的に示している日本文化の「誠」を、広池はさらに普遍化したものとして「慈悲寛大自己反省」の精神というものを考えた。後年、彼が創唱した最高道徳は、この慈悲寛大自己反省の

精神を中核に据えた道徳であった。

(2) 大正元年の大患

大患の襲来の近日中に迫っているのではないかという不安に悩まされながらも、学位論文の提出という目標があったためでもあろうか、辛うじて危うい中をくぐり抜けるようにして明治末年までたどりつくことができた。しかし、論文完成、そして提出にともなう安堵も手伝ったのか、明治四五年秋から大患にかかり、同年の大正元年には、いよいよ医師も手の施しようがなくなってしまった。

病院を退院した広池は再び、他人の幸せ実現のためにわが生命をささげ尽くすという有らん限りの、純至誠心を振り起こした。そのとき広池は「全身がゾーット」し、「清き血液流れて、病を去るなり」という経験をしたのである。自然の法則に精神的にも完全に従うという決意は、心底からの、魂を振起させての決意であった。したがって決意の披瀝とともに上記のような全身的な反応が現れたのである。その結果、医師に見放されるような病が「特に急に軽快の徴」を示しはじめたのである。

広池はつぎのように記している。

「かくのごとき重態に陥り物質的治療において全く窮まったので。ただ死を待つの外なかったのであります。ここにおいて同夜私は神様に向かって、改めて祈願をしたのであります。その祈願の趣旨は、今日の大患にては到底生命のあるはずなけれど、もし神様が私に一年の生命を貸してくださったならば、人心救済に関する世界諸聖人の真の教訓に本づくところの前人未踏の真理を書き遺しておきましょう。もしまた、さらにこれより永き生命をお貸しくだされますならば、当年一月四日お地場にて誓いしごとくに、私の学問、名誉及び社会の地

位全部を神様に献納し、生きたるままに神前の犠牲となって人心救済をさして頂き、全人類の安心、幸福及び人類社会永遠の平和の実現に努力さして頂きましょう、ということでありました。[59]」

「今日、山沢先生のお喩しに対して左のごとく治定。

(一)なき生命を助けていただく上は、今後の生命は自分のものにあらざるがゆえに、一切これを人を助くる道具に使うこと。

(二)右の次第に付き、いかなる事あるも自分のために生くるのでなく、人様のために生かしていただいて居るということを忘れず、献身的労働に服すること、前々治定の通り相違これなき候なり。

(三)つまり簡単にいえば、自分の損することだけを考えて、利益になることは皆捨つるというように考うるのである。[60]」

「その時に私は柏手して神様を拝み、そのコップを山沢先生より受けてこれを頂いたのであります。私がそのコップを口につくると同時に山沢先生はじめ一同が、柏手したのであります。その森厳なる光景は、私の心身に極度の感動を与えたのであります。それから私は神様を拝んで直ちに休ませて頂き、山沢先生は本部に帰られたのであります。

私はその時まで永き間昼夜ほとんど熟睡せしことなく、食欲等全くなかりしに、今このおさずけを受けて床に入るや否や、直ちに前後を知らず二時間余り熟睡し、それから眼を醒して大いに空腹を感じ、年来用いておったところの麦飯を食したいという気分がおこり、かつ当時体温は三八度内外でありましたものが、約一度も降下し、全く気分もよろしくなったのであります。[61]」

我々を生かしている存在、その本質は「生成化育」にあるとみることができる（広池は、生成化育の働きが、

人間において実現されるときが「慈悲寛大自己反省」の精神の発揚であるとした）。その極致は、「捨身」的行為として表されるであろう。大正元年の大病のときの広池はまさにそのような精神になりきったのである。そして奇跡的に一命をとりとめたのである。このときの体験は、「至誠、天地を動かさざれば生存しあたわざる境遇」におかれた広池が、文字どおり至誠をもって天地を動かした体験だったのである。

(3) 大正四年の困厄

大正四年一月、追悼講演会での言辞が誤解を受け、広池は四九歳にして人生上の苦難に見舞われる。事件は、広池が責任をとって身を引くことで落着に向かう。何ひとつ弁明もせずに引き下がってしまった広池の態度に、世間は「いくじなし」と評した。

実は、事件は一朝一夕に発生したものではなかった。すでに三年前から、その兆しを示し、それまで何回となく背後の暗がりから広池に矢が放たれていたのである。しかし広池は自分の正しさに自信をもち、「敵」に対抗心を燃やした。

事件が表面化すると、広池は、これまでの心の親との出会いを、幾度となく回顧し、その生涯にわたる「静的奮闘」に感銘を受け、「人格に感動」し、以後「足跡を踏み迹を追うのが当然である」と覚悟をした、と回想している。こうして、身も心も衝き動かされ魂までも変容してしまった出会いが、運命的な、根源的な出会いであったことを深く自覚するようになった。

そこで再び、精神的な親の、自分の寿命を縮めても敵を愛したあたたかいその心が、広池によみがえってくる。広池は心の親に促されるようにして、同じように「敵を愛し、助け、救済しよう」との覚悟を強め、心の親に肉

薄していった。日記には、「敵を愛する心になると体の調子がよい」と記されている。文字どおり体をあげて、広く・やさしい・開かれた「大勇の心」を表現し、確認していったことが示されている。

それまでの広池の世界は、善悪相対にひきずられていた境地で、悪いものを見ては動揺し自分の心までが濁る、いわゆる「道徳的」人間の陥りやすい世界から「いま一皮」抜けきってはいなかった。

ここで『聖書』の「放蕩息子の譬え」が思い出される。兄は確かに「道徳的」であった。父とともに暮らし父の言いつけに背かなかったのだから。しかし放蕩息子の弟が帰って来たとき、私には子やぎ一匹もくれなかったと言って、父親に迫っていった兄の言い分には、弟に対する怒りと嫉妬の念が含まれている。「道徳的」であろうとした兄は、それがためにかえって一番大切なもの——弟の身になってともに喜ぶということ——を見失っていたのだ。

広池はこの事件によって、いま一歩という境地を乗り越え、何もかもがはっきりと観えるようになった。この事件を引き出した原因は、悪を見てそれを憎み続けた心使いにあったのである。広池は「轄然大悟」して、以後、敵を「神様と思うて」感謝する苦難の道へ進む「大々的大決心」をした。それまで得心できる説明ができなかった「天の岩戸ごもり」が、我身の体験にそくして、偉大な宗教的信念にささえられたものであると、確信することができた。そして「無我棄身の境遇に安心立命」できるようになったのである。そのためであろう、事件のさなかでも、「安心のていにて熟睡」するなど、広池の態度には不思議な静けさがただよっていた。

こうして広池のからだ全体に「道徳」を越えたあたたかな心が生きてはたらき、「今回のことが起きてから体調がすぐれ、いろいろと活動してもますます体調がよい」（大正四年）と日記に記されるようになった。[62]

十五年後、この年の回生によって「ただ一人の至誠が万人を生み出す」こととなった、と回顧されている。[63]

むすび

以上、広池に体現された自然的な生き方を、部分的ではあるが、見て来た。これは、東洋社会に歴史的に数多く見られる自然的な生き方の中に位置づけられるであろう。他の多くの人々との共通する部分もあるであろうし、同時にまた広池の独特な面もあろう。いずれ稿を改めて比較を試みたいと思う。

小論を閉じるにあたり、広池の自然的な生き方の、その象徴的なエピソードを記しておこう。

昭和十年、麗澤大学の前身である道徳科学専攻塾が、現在の千葉県柏市に開設された。十五万坪を越える敷地に、昭和九年から諸施設が建設された。それに先立って広池は、まず諸施設の中心を定めた。そのとき選ばれたのは、敷地を覆う森の中で、最も年輪を重ねた大木であった。その大木の根元に神壇を設け、そしてその前に大講堂が配置され、外部から訪れる人は、その大講堂に向かって続く桜並木に誘導されるように工夫されていた。

このように広池は、生命あるものは人間のみならず植物も動物もこれを非常に大切にした。特に長い生命を保っているものにたいしては、右に述べたように深く畏敬した。そして広池は常に人間と自然界の生命とが調和を保って成長して行くよう配慮した。校舎その他の建物を建設する場合でも、なるべく木を切らずに済むよう設計したという。やむを得ず立ち木を建物に取り込むばあいには、自然木をそのまま建物の中に生えたままにした。

広池の自然的な生き方とは、自然の中に生まれて来た人間が、極力自然と調和して生きようとするものである。と同時に、精神的には、宇宙自然の心は「慈悲寛大自己反省」という内容をもつと規定して、全心身あげてその精神を生き抜こうとするものであった。これは、広くいえば東洋社会における「道」を求めて歩む伝統を受け継いだ生き方、といってもよいであろう。

〈注〉

(1)『タゴール著作集』第七巻。一九八六年、第三文明社
(2)広池千九郎『道徳科学の論文』（新版）七冊一七〇ページ
(3)同右九冊二八六ページ
(4)同右八冊四一七ページ
(5)広池千九郎『天理教教育部に入りし理由』（大正二年）
(6)広池千九郎『天理教にほひがけの文』（大正八年）
(7)広池千九郎『天理教信仰の真義』（大正三年）
(8)広池千九郎遺稿
(9)広池千九郎『近世思想近世文明の由来と将来』（大正四年）
(10)『広池千九郎日記』一冊一三八ページ
(11)広池半六から千九郎宛書簡（明治二九年八月七日）
(12)江見清風から広池千九郎宛書簡（明治三七年十月一四日）
(13)広池千九郎「回顧録」（昭和四年）
(14)広池千九郎　前掲『天理教教育部に入りし理由』
(15)広池千九郎遺稿
(16)広池千九郎「予が信仰」（明治四四年）
(17)広池千九郎遺稿
(18)同右
(19)広池千九郎　前掲『天理教信仰の真義』
(20)広池千九郎遺稿
(21)同右
(22)同右
(23)同右
(24)同右（大正二年）
(25)広池千九郎『助け一條の御話』（大正十一年）
(26)広池千九郎『伊勢神宮と我国体』（大正四年）
(27)広池千九郎『道徳科学の論文』（新版）七冊一七〇ページ
(28)同右、九冊二八六ページ
(29)同右、八冊四一七ページ
(30)同右、七冊二三〇ページ
(31)同右、七冊二四八ページ
(32)前掲『広池千九郎日記』第一冊、大正元年十月十日
(33)同右、大正元年十一月十一日
(34)同右、大正元年十一月二六日
(35)同右、大正元年十一月二日
(36)同右、大正元年十月二九日
(37)同右、大正三年十月十二日
(38)同右、大正元年十月二九日

(39)同右、大正元年十二月十八日
(40)同右、大正元年十二月十九日
(41)同右、大正元年十二月二七日
(42)同右、大正三年五月五日
(43)同右、大正三年六月十一日
(44)同右、大正三年六月十三日
(45)同右、大正元年十一月十二日
(46)広池千九郎遺稿
(47)前掲『道徳科学の論文』（新版）七冊一八八ページ
(48)広池千九郎『神社崇敬と宗教』（大正四年）
(49)拙稿「広池博士の平和思想」（『モラロジー研究』二五号、一九八九年）
(50)前掲『広池千九郎日記』第一冊、大正元年十月十五日
(51)同右、大正元年十月二九日
(52)同右、大正元年十一月十二日
(53)広池千九郎遺稿（大正二年）
(54)前掲『広池千九郎日記』第一冊、大正三年十月三十日
(55)広池千九郎遺稿
(56)『広池博士講演録』大正八年
(57)前掲『助け一條の御話』
(58)前掲『天理教にほひがけの文』
(59)前掲『回顧録』
(60)前掲『広池千九郎日記』第一冊、大正元年十二月二四日
(61)前掲『回顧録』
(62)前掲『広池千九郎日記』第一冊、大正四年
(63)同右、第四冊、昭和五年